

憑依転生くいな

ジジュー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンピースの世界でくいなになり、強さを求めて改変しまくり捏造しまくり、仲間を集めて、麦わらの一味に対抗するかもしれない
するかも？かも？

目次

1話、憑依転生	1
2話、お金と鍛錬	7
3話、アローン襲撃	13
4話、いざ海軍支部	21
5話、入隊	28
6話、また模擬戦	34
7話、実力	41
8話、確信犯	48

1話、憑依転生

見える景色は宇宙を光速で移動しているように思えた。

——星の光が線のように流れゆく——

どこかに着くのだろう、目の前を強い光が全体を覆いだした。

景色が変わりそこは小さめの煌びやかな部屋の中。

そこには、1人の高貴な女性が待っていた。

「よくきました。早速ですが、その3つの箱からくじを1枚つつ引いてください」

言われるままにくじを引いていく。

1つ目、くいな11歳。

2つ目、いくいくの実。

3つ目、無双色の覇気。

「はい、この3点に決まりました。なかなかの能力を手に入れましたね、では早速憑依転

生」

痛い・痛い・いてーよ!!

包まれていた光が消えていくと、痛みどころじやなく今度は『く、苦しい』

ここは土の中だ!!無我夢中で掘り起こし、地上に生還!!死ぬかと思った。

仰向けで埋まってたら終わっていたぞ、体育座りだったから何とかなつたが・・

・・・それにしてもどうすんのこれ・・・なにも着てない・胸も膨らみかけだし・

周りを見渡すと、やっぱりお墓・埋められていた十字架にリュック、あと刀があった。

中を見て見ると!服がある見つけた!あと少量のお金と食料も発見!お供え物?早速服を着た。

墓に埋められていたんだから、死んでいたんだよな?

誰かに見つかるかと面倒ごとになるな、この地は離れたほうがいいだろう。

1日歩き通しで、やっと船着き場を見つけた。

船で別の町か村に移動しよう。この顔を知っている人になんかに会ったら面倒。痛い出費だが仕方ない。船の行先の島まで3日以上かかるらしい、食料の買い出しもしないと飢える、この出費も地味に痛い。

3日間で、確認とこれから何をするか考えていく事にした。

名前は、くいな、女、11歳、

悪魔の実、能力者でいくいくの実。無双色の覇気。この二点がよくわからない。

でもなかなかの能力って言われたから結構な物なんだと思う。まあそのうちわかるだろう。

3日間色々考えた。何と言っても強くならないと話にならない。

この時点ではゾロよりもくいなは強いはず。

寝泊りする場所の確保と、先立つ物も不安だ。金が無ければ食べる事もきつくなる。バイト？狩り？釣り？何でもいいから生活出来るようにしないと・・・

陸が見えて来た。草原や森がある、結構いい場所だ。

船着き場に着いた。住む場所を早々に決めないと、贅沢は言わない、雨風さえ凌げれ

ば今はいい。道行く人に聞いてみた。

「すみません。住む場所を探しているんですけど、貸してくれそうな人いませんか？」

「ん〜空き家が結構あるから、貸してくれる人はいるだろうね。両親は？」

「いません」

「（親がいないのか）……あなた何歳？」

「11歳です」

「（まだまだ子供ね〜今更一人増えても同じか）……うちくる？ただではないけど、手伝いをしてくれるならいいわ」

「……いいんですか？……お願いしたいです」

「期待はしないでよね、じゃ〜ついてきな」

雨風凌げればどこだっていい、それにこの人見覚えがある知っている人だと思う。

何をしていくかよく考えないと、前回同様早々に積んでしまう。

前回はヨサクで、ルフィの代わりにシャンクスから麦わら帽子をもらおうとして、どこで間違えたかシャンクスに殺された。

前々回は、オンラインでジャンゴ、プレイヤーに速攻で処刑された。レベルが上がるまではもうオンラインではやらない事に決めた。

初期で積んでるからレベルも上がらない。これが上がらないとメジャーのキャラがクジで当たらない

悪魔の実も同じだし、3つ目も同様だ。

ここはフルダイブゲーム、ワンピースの世界だ。約100年前、あの！伝説アニメの世界だ。

キャラになって自分の好きなように改変出来る。だが原作に沿った進み方が安全だと言われている。

そのあたりは適度なバランスがあるらしい。

人の持つ五感が限界まで反映されているのも特徴。このためやられたりしたら一カ月は再開できない。

ダイブしてしまえば、リアルを感じるのは始まりの頃だけ、知識は残るが後はリアルの世界はほぼ忘れてしまい、この世界がリアルだと思ってしまう。誰も死にたくないの
で必死だ。

くいな11歳、全裸で胸が膨らみかけ。これらは100年前なら社会問題になったかもしれない。

50年前ぐらいにフルダイブが出来るようになり、取り締まることが殆ど不可能と判断され、今では自由となっている。

リアルの世界の犯罪は、100年前と比べると10倍以上刑が重くなった事もあり、いたって平和だ。

2話、お金と鍛錬

居候する場所が決まった。小高い丘の上、大きいとは言えない家、同じ年齢くらいのおるさい子供二人。

午前中に手伝いをすれば、午後は自由にしていらしい。結構なものだ。

「私は、この子達の親代わりのベルメールよ、みかん園をしているわ。あなたはの名前は？」

2人連れてきて自己紹介を始めた。

「くいな、もうすぐ12歳です。船に乗ったらここに着きました、親はいません（本当のこととは言えないな）剣豪を目指しています」

「ノジコ10歳よ。特にやりたいことはないかな」

「ナミ9歳！正確な世界地図を書きたい」

色々と聞かれ、また逆もしかり。またここに住んでいる3人は血がつながりのない者同士の家族。

「貧乏だが一人増えた所で大きな問題ではないと。」

出来る限り、強くなるための努力を、初めに悪魔の実の能力と無双色の覇気を把握をしたい。

「先立つ物、お金もどうにかしたい。」

次の日午前中、みかん園の手入れなどを手伝う毎日、午後は訓練だ。

「ノジコとナミ、午後は町に繰り出し遊びまわっている。」

「ベルメールさん、昔は海兵だったんですよね？剣術の相手をしてもらえませんか？」

「昔、海兵だつて何で知ってるのよ！」

「誰だったか？話してるのを聞きました」

「……そう、でも私剣術は得意ではないわよ、それでもいいかしら？」

「1人でするよりも、効率が良いのでお願いしたいです」

「いいわよ」

時間や用がない時、ベルメールが剣術に付き合ってくれらることになり、効率は上がったかに思えた。

でも、言葉通りベルメールの剣術は弱い：：子供のくいなから一本も取れないほど：：逆にくいながベルメールの先生？こんな感じになっている。

悪い所など指摘を続ける事一週間後!!

「くいなは天才??自分でもわかるほど、剣術が上達してるのがわかるわよ！実際の強さはまだわからないけど、数倍は強くなった気がするもの！」

「そうですか？あまり変わったようには見えませんか？」

「言いたいことはわかるわ・・・元がどうしようもなかったのよ・・・でもね、くいなに付き合うようになってからは日に日に感じるのよ」

「強くなる事は、悪い事じゃないです」

「そうよね」

強くなることその他にもう一つ、お金集めだ。

海から『てんぐさ』これを集めて、乾かし、真水で洗い何回か繰り返した。

そろそろいい具合になったはず。

乾燥したてんぐさを木でたたき、それを水に入れて汚れが落ちるのを待つ、汚れが落ちたところに水から出し、今度は綺麗な水適量とてんぐさを煮る。

こした煮汁を冷やせば寒天になる。

これでお金を稼いでおこうと計画をした。海を見たらてんぐさが所狭しとあるのを見つけたからだ。

試作品を4人で食べてみたら、意外なほど好評だ！これは売れそうだ！

まだ子供のくいなだけでは信用も無いだろう。村の商店とも顔なじみのベルメールに頼み交渉をしてみよう。

結果毎日200個は仕入れてもいいと……うくん：思ってたよりも全然お金になりそうもない……

この町だけで売るからだ!!港に来ている貿易商と取引すればいいのではないか!

……お試して今回は200個は引き取ってもいいと……次に来た時は売れ行きで数は変動する……前途多難だ。

初めはこんなもの……引き取り手が出来ただけでもうまく行った方だと思う。

約1年後、剣術の鍛錬も成果をもたらせた。

くいな、ベルメール共に結構な技術を身に着けることになっていたが、教えてくれる者が居なければある程度で止まってしまう

強い者、教えてくれる人がこの村にはいないのが残念。

ゼリーの方も売れ行きがいらしく、貿易商が一度に1000個買っていくようになったのはありがた。

ココヤシ村の名産になる勢い。みかんもゼリーに使ったりしているので、もう貧乏の枠は外れている。

今では村の、一、二位になるくらいまで伸び上っていた。

みかん園は人を雇うほどに裕福になっていたので、ナミとノジコは、好きな事が出来る時間が多くなった。

ナミは近隣周辺の海図の作成を真剣に取り組みだしていた。それを見ていたノジコもやりたいことが無かったのか？ 対抗心が出たのか？ 競い合うように書いていたが：ノジコには絵の才能がそんなになかった・・・ノジコは書くのがダメなだけで、頭には入っているらしい？

私は13歳になり、顔見知りの商人も出来た。

結構大きな町の商人との取引のために、ココヤシ村を離れて今はのんびり船の上、お金がないと船も買えないでしょ？

グランドラインに行くにも船がないとね・・・その為に今は頑張らないと。

約二週間、のプチ旅行気分!!

商談もまとまり、大きな町をブラブラと歩いてきた。海兵もちらほら見える。

海兵を見た途端、ざわつくように嫌な予感が駆け巡る・・・海兵・・・海賊・・・

嫌な予感がする！遊んでいる場合じゃない、4日後の船では遅い！今日出る船に飛び乗った。

3話、アールロン襲撃

嫌な予感は当たってしまった。村はだいぶ荒れていた。

病院にはケガ人が、多くいた。

くいなは急ぎ丘上の家に向かう……。家の周りには……。血の跡が生々しく残っている。

原作ではベルメールが……。家の中に入るとベルメールが寝かされている。そばにノジコが座ってみている。

「ノジコ、何があつたの?」

「……魚人が来て……。お金……。ベルメールさんが……。で……。ナミが連れていかれた
……」

大体はわかる。でもベルメールさんが死んでいない!

あ! お金が人数分払えたから?? わからない事も多い、

「……ゲンゾウさんの所に行つて、詳しく聞いてくる。ベルメールさんは大丈夫よね？
ノジコ一人でも大丈夫？」

「う、うん」

くいなは急ぎ、町に戻りゲンゾウを探し話を聞に行く。

一日前アーロン襲撃

ココヤシ村、普通の一日が始まるはずだった。

港に海賊旗を立てた船が入ってきた。乗っていたのは、この東の海では珍しく怖い存在の魚人だ。

鳴り物入りで町を徘徊する魚人達。宣言もした。

「俺がアーロンだ!!コノミ諸島を俺の支配下に置く!!さあ奉貢の時間だ!!シャハハハハ……自分の命を俺から買うんだ!大人一匹10万ベリー!ガキ一匹5万ベリー!払えねえ奴は殺す!!」

恐怖で町の全員が金を払う。回収が終わり引き上げようとした時、町外れから煙が見つかり、ベルメールの家がバレた。

アーン一味全員で、その煙の出所まで取り立てに……家の前まで来た一見。くいなどの訓練で、気配が少しだが読めるようになっていた。

ベルメールも異変に気が付き、反撃体制に、家に入ってきたアーンを蹴り飛ばし、馬乗り状態になり口の中に銃口を突きつけた。

しかし、魚人のアーン銃口事かみ砕いてしまった！ベルメールもこれには驚いたがすぐに体制を整えた。

今のベルメールは銃よりも刀の方が、実力を発揮できるが斬れない刀だ……刃が無い訓練用だった。

それに向かい合う魚人達。木刀で戦う用なもの、普通の相手だったら勝てたはずだった。

幹部らしき二人と、兵を半分ぐらい意識を刈る事は出来たが、体力の限界で、後は殴る蹴るのサンドバック状態になってしまった。

ゲンゾウと大勢の村人が到着する頃には、ベルメールはひどい状態だ、かろうじて意識を保っている。

それを見たゲンゾウは、止めに入り、ベルメールに今は素直に金を払えと忠告し保管場所を聞き、代わりに取りに行き払った。

金を払わせたが仲間がやられたこの現状、アーロンは腹の虫がおさまらない！

ベルメールを蹴り飛ばし、そこで意識を手放した。今度はそれに我慢がならないゲンゾウや村人。

乱闘になる・・・普通の人は魚人の相手などなるはずもない。すべて返り討ちにあつてしまった。

これでいくらか留飲を下げたアーロンだ。これで帰るはずだった。

心配になったノジコとナミが、ベルメールのそばに駆け寄り逆上したナミは、魚人に突つかかて行き軽く振り払われ気絶してしまった。

ナミのポケットから一枚の紙が落ち、タコのような魚人が拾い、見ようとしたところ：ノジコが『ナミが書いた海図』をと行ってしまふ。

腹の虫がまだ完全に収まっていないアーロン、二度と逆らう事が出来ないよう、ナミを人質に連れて行く。

昨日から意識も戻っていないベルメール、町の住民の怪我、ナミを人質にされている。海図の事もある、人質と言う名の傀儡と同等だ。

私がいちとしても、アロン一味に勝てたかどうかはわからない。まだ初期なので原作とこの世界の感覚は別なものだとわかる。

ベルメールやノジコには悪いけど、意識を取り戻しても助けに行こうなどと考えないでほしい。

序盤から原作を大きく外れると、どうなるのかわからなくなってしまう・・・ここでもしアロンを倒してしまったら、泥棒ネコ、ナミは居なくなるかもしれない…

ルフイのクルーに航海士がいないと・・・詰みそう。本来はベルメールもここに居ない方がいいはず・・・

「ノジコ、心配なのはわかるけど、私が見ているから少し休みなよ。起きたら知らせるか
らさ」

「……………」

ノジコも限界だったのだろう、横になるとすぐに寝入ってしまった。

ベルメールの意識が戻ったのは次の日の夕方だった。

意識が戻っただけで、怪我の方はまだまだ全快するには時間が必要。

「く、くないな……みんな無事？」

「ノジコは怪我も無いけど、ナミは連れ去られたみたい……」

「何処に!!」

「わからないよ……私は昨日戻って来たら……こんな事になっていた……」

ベルメールは起きようとするが、怪我の影響があり思うように身体を動かせない。

そこにノジコが急ぎ駆け寄ってきた。今までの不安が溜まっていただろう？ベルメールが起きているのを見ると大泣きしながら抱きついた。

「ノジコ、怪我はないよね？安心した」

「う・うん、でもナミが……」

「大丈夫!……私が必ず……助ける」

「ベルメールさん、まだ動ける状態じゃないんですから無理せず休んで……」

ベルメールに水分を取ってもらい、また寝かせると数分とかからずまた寝入ってしまった。まだまだ身体が弱っている。

アーロン襲撃から3日後、ナミがココヤシ村に現れた。
くいな、ベルメール、ノジコがいない中で起こった事。

ナミは手に持っていた札束を、村人に投げつけながら、驚愕な言葉を言い放った。

「私はアーロン一味に入った！お金も好きだけもらえる！……次からは……回収する側になる、払えない人は殺します！！」

「「「「！！！！」」」」
！！

村人は驚き驚愕する中、一人の男が

「ナミ何を言ってるんだ！！ベルメールが悲しむぞー！！」

「あの人たちに未練なんか無いわ……立場が違うもの！会ったら伝えておいて……『い

「い暮らしをしたから邪魔しないで」って。それと支払いは必ず守って、本当に殺すから……そのお金は私からのお情けよ」

「村から出て行けー!!」

村人から色々な罵声を浴びせられたナミ、付き添いの魚人が数名現れ、帰って行った。

くいな達にも、ナミの事は知らされた。

ベルメール、一週間はベッドから出る事は出来なかった。動けるようになった頃には、怪我の方もある程度は回復しているが、全開にはまだまだ。

ナミの事を考えるベルメール、『私が弱かったから?』などと自分を責めるように自問自答を繰り返していた。

4話、いざ海軍支部

10日ほどが過ぎ、怪我も回復したベルメール。ナミの居場所を突き止めようと動き出した。

時間もかからず居場所は判明。アーロン一味の拠点が目と鼻の先、ココヤシ村がある島と同じだ。

今にも飛び出しそうなベルメール、それをくいなどノジコ、ゲンゾウも必死に止めた。この村でまだ戦おうとする者はベルメール以外誰もいない・・・村人はゲンゾウを含め、魚人相手に傷一つつけることなく敗れ去り、大怪我を負った記憶が残っている。

運よくナミを取り返したとしても、アーロン一味を壊滅させなければ、同じことの繰り返し、それよりも悪い方になることもあるだろう。

「ベルメールよ、悪い事は言わん！お前だけでは何もできない、かえって状況を悪くする事になる。今は耐えるしかない」

「でもナミは?! ナミはあんなこと言うはずがないのよ!!何か理由があるはずよ、親の私
が助けてあげないと……」

「それはわかっってはいるが、ナミにも何か考えがあるはずだ。信じてやるのも親だろう？」

「私も、今行くのはやめた方がいいと思う。今度は必ず殺される気がする……」

「そうだぞ！最悪の事態になった時残されるくらいだとノジコの事も今は考えてやれ。それにナミの扱いは悪くないみたいだ」

「……今のままじゃどうしようもないって事ね」

私と、ベルメールで相当無理をすれば、もしかしたらアールン一味を壊滅出来るかもしれない。確実ではない上に失敗したら確実にやられる……

村人の加勢があつたとしても、時間稼ぎ程度だろうし、必ず殺される……あと8年間みんな我慢してルフィが助けてくれるはず。原作よりは辛くないようにはするからね。

ベルメールの決意、方針が決まった。

「このまま今の私では何もできないわ!!海軍に復帰して軍を動かしてみる。それまでみんな辛いでしょうけど頑張っていて!」

「俺からも政府や海軍に呼び掛けているんだが、何も変化がないんだ。海軍は信用でき

るのか?」

「だから私が戻って動かしたいんだよ」

海軍支部を信用できない事は、ベルメールも十分にわかっていた。支部は癒着が多い、それでもなければ未練もなく辞めたりはしなかった。

ナミヤノジコがいたとしても、海軍に残ることは十分に出来た。

「私もベルメールさんについて行きます。海軍で少しでも強くなりたい」

「二人が行ってしまったら、残されるノジコはどうする?」

「ゲンゾウさんが気にかけてあげてほしい……ノジコは……くいながまとめてくれた大きい取引を……町人が困った時には手を貸してあげて」

「ベルメールさん!私もついて行く!!」

「……そうね……一人残しておくのも不安よね……でも今までのように甘い暮らしは出来ないわよ?残った方が幸せだったと思う事が多いかもしれないわよ?それでも来る?」

「う・うん、行く」

「ゲンゾウさん、こう言うわけだからみかん園とゼリー、後の事はよろしくね。取り立て

で困るような人はここで雇ってあげて……」
「ああ〜わかった」

3人の目的も決まった。行動は迅速、強のうちに数日分の食料などを買い、壊されていた魚船の修理をした。

明日出る商業船について行くこととなった。

私も船貯金で溜めていたお金を、ゲンゾウさんに村の人のために使つてと渡した。これで初めの所持金とほぼ同じ……何とかなるよね？

アーロン一味に見つかったりしたら面倒事になるのは必須。朝早い出発。

商戦の後をおんぼろ漁船で後を追う3人、航海術も持ち合わせていないため逸れたら遭難は確実だ。

2日程度で街に着く予定。

「ベルメールさん、海軍にはすぐ入れるの？」

「くいなら問題なく入れると思うわよ。でもノジコが問題よね……体力や技術などを

見るからね」

「ノジコはナミと海図作りをしていたんだし航海士は？軍艦の非戦闘員を考えたら？どう？」

「そうね！海兵にも航海士や操舵や船医などいろいろあったわね。全く戦闘訓練をしないわけではないからね、ノジコどうする？」

「うん、ナミと同じのをやる！ナミにあつた時に驚かせてやる！」

方針も決まった、私とベルメールは戦闘員、ノジコは非戦闘員だから雑用が多くなるんだらう？

それとベルメールさん言うには、アーロン一味には支部程度では対抗できないかもしれない？でも半分はベルメールさん一人で倒していたんだけど？アーロン1人が別格なのか！！

何をするとも個々に船の上で考え込んだり、好き勝手に過ごしていた。

2日後、何事も無く街に着いた。さらにここから1日かけて海軍支部に向かい、上陸した。

海軍第153支部の門の前、海軍に入りたい旨を伝えた所速やかに中に通され、案内

役に先導され部屋に入った。

「私は海軍少佐だ。話は聞いている、お前たちが海軍入隊希望者だな？」

「あー!! コンジじゃないか! 久しぶりね〜! 私よ私! 同期だったベルメールよ忘れた?」

「へ!!」

「戻ってきたのよ! よろしく頼むわね」

少佐は慌てたようにアタフタしだし、何を思ったか慌てて部屋から出て行ってしまった……

先導役の兵士もどうしたらいいのかわからない、とりあえずここで待つように言うだけだった。

私は、ベルメールさんが過去に何かしでかしたんだと思い、目線を向けてみたら……見事に外されたよ……何かあったようだね……

しばらく待つと、もう一人連れて戻ってきた。少佐の上役だろうと想像は出来る。

「久しぶりだなベルメール、ガガル大佐だ。まだお前に殴られた鼻は曲がったままだな」

「思い出したら……なぜか怒りが湧いてきたわよ!!あんたが私の胸を触ってきたからじゃない!!」

「アレは事故だろ!!」

「……まあいいわ……海軍に復隊したいんだけど、あとこの子たちは入隊希望よ」

「……今は少しでも人が欲しい時期だ。問題ない、が階級は能力を見てからになるぞ」
「はいはい。いつテストするんだ?」

「今から訓練所に行くが、問題あるか?」

くいな、ベルメール、ノジコは顔を見合わせ確認を取り、問題ないことを伝えた。

案内役を除く5人は訓練所に向かうのだった。

どうやらこの二人が相手をするらしい。

5話、入隊

「ノジコは非戦闘員で航海士あたりを希望で、私とくいなは普通の海兵希望よ」

「でもな内勤とは言えテストは受けてもらうぞ……ベルメールは確か狙撃兵だったか？」

「今は近接戦の方がいいかな、こっちのくいなも同じね」

「コンジ少佐、初めにベルメールの相手をしてくれ」

二人は少し離れて構える。先に仕掛けたのは少佐だ。それほど早くない剣戟、ベルメールにしたら楽だろう。

やられはしたけど、人間よりも身体能力が高い魚人を一人で十数人相手にできたのだ、あまり強そうではない人間の剣なら脅威にはならない。

少佐が何度打ち込んでも簡単にいなしている。

ベルメールさんが、私と剣術始めたばかりの時と反対の事してるし!!あれ?少佐さんはそんなに強くないの??

私と全く同じことしてる……首元に寸止め、頭に胴に手に全部寸止めだよ!!これは見ればすぐわかる……実力差が無いと出来ない芸当。

「やめーい!!少佐もうこの辺でいいだろう?」

「了解です……以前軍にいたころのベルメールは最下位争いの常連!!全くダメだったのになぜこんなに?ここまで腕だとお前の相手が出来そうな人はいないぞ!」

「くいなの相手をしていたらいつの間にか?『あはははは』強くはなつたと思っていたんだけど、今まで実感がなかったのよね。いつもくいなに今と同じ事されていたからさ」
「はくあく!!今のお前がか!!」

「そうよ。くいなの相手してみればわかるわよ」

コンジはガガルの方を向いて手と首を振っている。大佐は察したようで、くいなの相手はそのままベルメールと模擬戦をしてくれと言った。

出来れば海兵とやってみたかった思いはあるんだけどね……いつも相手はベルメールさんだけだった。考えてみたら他の人としたことないや!

いつもと同じ軽くやれば怪我もしないでしょう?始めたところから比べたら、よけるの

も受けるのも上手くなってきているんだから……始めましょうか。

「ベルメールさんは、いつもと同じで加減無しでいいですよ」

「わかつているわよ！じゃ〜行くわよ」

金属音がけたたましく鳴り響いている、コンジ少佐の時とはまるでレベルが違う。

くいなにしてみれば稽古のようなものだろう。寸止め、寸止めの連続。ベルメールの剣戟が遅いわけではない。くいななどの差の開きが大きいだけだった。

「二人ともよくわかったも面白い」

「ふう〜寸止めだとわかっていても、くいなが相手だと怖いのよ」

「二人の実力はよくわかった。ベルメールは退位した時と比べられないくらい強い。実力から言えば俺よりも上の階級でもおかしくないが、中尉までしか俺には与える権限がないんだ……二人には中尉として書類を提出しておく」

「そう？ありがとうございます」

ノジコはやはり階級無しの雑用からに決まった。大海賊時代に突入から十数年、海兵

の数が足りない。

海賊など凶悪犯罪者以外の者は、来るもの拒まずで受け入れていた。

ふと思った。この状況って別に海軍に入っても変わらないじゃない??強い者がいない!今までと変わらず相手はベルメールさん・・・

デメリットの方が多かった・・・海軍の仕事が増えただけ・・・でもノジコは別、航海術を専門的に教えてもらっている、戦闘の基礎も。

それと、海軍時代のベルメールさんの噂もちらほらと・・・身体が触れただけでも同僚に手をあげるのは当たり前、上司でもそれは変わらなかったと・・・男に免疫がない生娘か・・・

海軍の絶対比で女性が少ない。どんなにガサツでも女性はモテる!それはベルメールも例外ではなかった。

海軍にあまり未練を持たない多くの女性は、左官クラス以上と寿退役が多かった。理由は給料が良く安定し、殉職したとしても家族には一生見舞金が入るから。

ひどい事にそれ目的で海軍に入る女性も多にいる。

「ベルメール、相談なんだが？」

「何よ？」

「お前もそうだが、特にくいなはここに居るような奴ではない。本部に行く事を進めた
い。将来将官になれる人物だと思ってる」

「……本部か……あいつがいるんだよね……ここに居ても……相談しておく、返事は
あとでするわ」

「おう！いい返事を待ってるいぞ」

その夜、ベルメールは二人に話をした。ノジコはナミから遠くなるため、積極的では
ないが一応賛成した。

ベルメールは本部に何かあるのか？仕方なしで賛成、くいなは何も言わず大賛成。

話が出た次の日には、行く返事をしたが……ノジコは人数に入って無かつたらし
いが……そこは3人じゃなければ行かないとごねた。

移動手段として、約一か月後、本部からこの東の海を巡回に来る軍艦に乗ることに
なった。

簡単に本部に行けることになった！約一か月後だから時間があまりない：

私は約三週間かけて東の海を巡回訓練名目を勝ち取った！軍艦よりも小さい軍船で、ある目的のための行動だ!!職権乱用とも言う。

ベルメールさんとノジコは一緒ではないけど、航海士と、海兵数人をつけてくれた。こんな小娘に使われる一般兵は災難だね…

くいなが居ない海軍支部、ノジコは大きく成長していた。ノウハウをベテラン航海士から毎日8時間!!みっちり叩き込まれていた成果だ。

ベルメールは、新米兵の稽古相手を務めていた。ノジコも朝の2時間はこれに参加していたが、成果は…

その後は何事も無く、くいなは三週間後無事戻ってきた。

くいなが戻ってきて3日後、支部に連絡が入り、明日には本部からの軍艦が着港すると全員に伝達された。それからは迎える準備で支部は慌ただしくなった。

おもに補給の準備だ…：：：歓迎の準備は港でリーハサルもする力の入れよう…：：：三名はそれらには加わらず、旅行にでも行くかのように荷造りなどをしていた。

6話、また模擬戦

本部から東の海に来るのは、この人ぐらいかな?! 私用での目的があるからある意味納得! ルフィのじいちゃん

普通の人から見たら英雄ガープだし、でもね、私はそんなにすごいとは思わないんだよ……原作を知っているからかな? 活躍場面が……

いつもせんべいを食べていて、子供のような? 行動をしていた。そんな感じ! でも強いんだろうな

英雄ガープ率いる船員たち、支部から見たらまさに雲の上の存在、無事入港済み、降りてくると同時にガガル大佐が一口。

「ガープ中将率いる船員達に敬礼——!」

海軍に居たベルメールには驚愕だったようだ。ノジコに至ってはよくわかっているな

い様子。

出迎えも終わり船員たちは用意された部屋などに向かう。ガープ中将と副官のボガードが支部指令室に向かい、本部移動になるくいな達との面会。

くいな達三名は、先に指令室に待機していた。

「こんなベルメールさん見たことないわね！どうかしたの？」

「……くいなはわからないの？あのガープ中将よ！海賊王ゴールド・ロジャーだよ！わかるわよね？」

「それ違う意味になってるよ、海賊王とともにやりあえた人なんですよ？」

「そ・そうよ、それよ。海兵の中の海兵なのよ！」

「わかったから落ち着こうよ。ノジコが変にソワソワしてるじゃない。ね？」

「私あまりわからない……」

ベルメールが興奮しておかしくなるほどの人物が……ドアからじゃなく壁から入ってきた。

ガガル大佐は青くなり……ベルメールも青くなり……ノジコはへたり込み……くいなだけが平然としていた。

「あ!!悪い」

「あやまるくらいなら初めからやらないでください……それと大佐、請求書を本部のガープ中将宛てに送ってください」

「はーはい!了解しました」

「おい!!了解しなくてもいいんじゃないや……まあいいわ。その娘以外はだらしがないぞー娘、なぜ平気なんじゃ?」

「なぜと言われましたも?何となくわかったとしか言いようがないですね」

「ほお〜拙いが見聞色の覇気か?なかなか見どころはあるようじゃな」

「中将よろしいでしょうか?普通にドアがあるのに、壁を壊して入って来るのを見たら普通はびつくりしますよ?それに中将は海軍の英雄ですよ!支部なら余計にです、居るだけでも……ご自身の立場お判りでしょうか?」

「その通りです。もつと言ってやってください、私から言っても聞いてくれませんかから」
「ガハハハハハハ……悪かったわい、すまん……」

ガープの何とも早い切り替えしだ。

「それで、この三名が本部に推薦なんじやな？」

「はい！そうであります」

「じゃがな、本部があるグランドラインとここではレベルが違うぞ？連れて行って早々に死なれでもしたら、ワシの寝覚めが悪くなるんじやが」

「軽い手合わせでもしていただければと……」

へっ！ガガル大佐く！！私たちを殺すつもりですか！！一方的にボコられるじやない、死んじやうよ……ベルメールさんも青を通り越して白くなってるよ倒れちやうく

「ボガード軽く相手をしてやれ」

「ハッ！」

入隊テストをした場所に移動した。いつもなら新兵が訓練をしているが、今日は補給やら歓迎に回っていて誰もいなかった。

今回もベルメールから始める。

「ベルメール中尉です。全力で行きます、よろしく願います」

「ボガードです。こちらこそ、お手柔らかにお願いします」

上官がガープでしつかり者のボガードが副官、だからこそこれでしつかりバランスが取れている。同じタイプだと大きく偏るだろう。

模擬戦開始、ベルメールから全力で斬りかかる。ボガードも海軍本部所属ガープの副官だ、何度も受けては返す。しばらくは互角の打ち合いが続いた。

悪魔の実の能力者同士の戦いではない、純粋な剣の戦いだ。技量とスピードの勝負。

ボガードさんが本気なら私の相手にはならないみたい……なんか最悪な事が脳裏に浮かんで来た……ボガードさん……期待していますよ、隠れた力とかを発揮してくださいー！

動き始めてベルメールがダンダンと推し始めて来た、ボガードさんの攻撃を見切れるのが多くなり、攻撃に余裕が出来始めた。

今はまだ若干さわり程度だが、ベルメールは見聞色の覇気に目覚めかけていた。だが当の本人ベルメールも、くいなもその事には気が付いていない。

気が付いている者が一人だけいた。ガープだ！戦鬪を見てニヤニヤしていた。

「ボガードさん、手を抜いているんですか？」

「いや、全力ですよ。あなたの方こそ初めは手を抜いていたんですか？」

「初めから全力ですよ」

ボガードの攻撃をかわした瞬間、懐に踏み込み首筋に寸止め、これで勝負ついた。

「中尉は強いですね、私の負けです」

「あ、ありがとうございます」

「ガハハハ、なかなかやりおるわい！ボガードに勝つじやと！わしやくびつくりじや！……小さい中尉の方が強いのじやろう？わしが相手をしてやろう」

あくあ……予想はしていたけど本当になるとは……私死んじやうんじやない??ガープさん手加減とかしてくるイメージ全くないもの……どうしよう。

「中将、手加減してくれるんですよね？ついうっかりで死にたくありませんよ？」

「あたりまえじゃ！小娘に本気で殴りかかるはずなからう」

「本当にお願ひしますよ・・・」

ガープは中央で仁王立ち、くいなは構えを取って身構えている。

7話、実力

ガープさんと対峙して初めてわかった。どこから行くこうとも、すべてカウンターで返されるイメージしか浮かばない……せんべいを食べてるイメージとか思ったけど、どうしようもない怪物じゃないか。

中には最も嫌な顔面パンチこれはやだ!! 右から行くのと正面から行くのはまさにこれだよ……他から行ったとしても体を受けるかの違いなんだけどね……痛そう。

両者とも動けないように見えるが、ガープは違う。くいなは文字通り動けない。

「おい、来ないのか？ ワシから行くか？」

「……どこから攻めに行っても、同じなんだもの！ 行きたくないわよ!!」

「ほくくやはりわしがいらんだ通りじゃわい……ボガードの相手にも感じた事も、当たりのようじゃな」

「あく!! そうですよ!! ハイ!! この通り降参です。ハイ! 終わりで……」

痛い思いをしないで終わる方法！それは降参すればいいのよ!! 私って頭いいじゃないの。

「おい娘っ子。それじゃテストにならんじやろ？わしは手を出さないから、打ってこい」
「本当ですね!!それなら行きます」

くいなはスピード重視で、攻めに全力を注いだ。しかし刀は空を切るばかり、斬りつけた場所にはガープの姿は無い。

この繰り返しを何回かしていると、くいなが刀が予測したかのように当たる寸前までに迫ってきている。

これにはガープも少々驚いた様子。

ガープさん！動き早いです！でも全力の私の力も出せているし、勉強になるわ。初めはただ早いだけかと思っていたんですけど、打ち込む寸前に消えている感じだよ。

フェイントも混ぜてみた：：うん！余裕でかわされた：：でも時間がたつにつれなぜか？動きを追える気がしてきたのだけど？慣れたのかな？

「そこだ〜〜!!」

くいなは刀で切りつけた後、見えていたかのように蹴りを放った。偶然が重なっただけかもしれない一撃。

胴体を狙った蹴りだったのだろうか……身長が足りなくくいな……男には辛い場所にあたった……

「はがっ!!!……痛い何するんじや〜!!クソガキがゴラツ〜!!『ボコツ：ホギヤ〜!』……」

ガープから打ち下ろされた拳が当たり……くいなはファーストキスは地面としていた。その隣でガープもある場所を抑えつつ、地面をのたうち回っていた……

なんとも閉まらない結末になった。

「その二人は、気にせず最後の一人、そちらのテストを始めますか」

「ボガードさん、ノジコは非戦闘員で内務を希望しています。テストは無理かと思いま

す」

「私には決める権限はないので、では中将判断になります」

まだ完全には立ち直っていないガープだが痛々しそうにこちらに来た……くいな
のダメージはさほどでもなかったようだ。

「くいな!!あれは反則じゃ!!つぶれるかと思ったわ」

「蹴りあげたらタイミングよく……狙ったわけではありませんよ、でも私も殴られた
じゃないのよ!!」

「それはな、ついな!ガハハハハ……でもなワシの方が痛かったんじゃぞ……もう
一人の娘っ子も、鍛えれば問題なからう」

「中将の判断には私は何も言いません。では予定通り2日後出航です」

「「はー!」」

ノジコも無事本部分行きが決まった。本部に着くまでは、航海の知識を身体で覚えさせ
るような事を言っていた。

ガープさんマジ強いです。ただ私が弱いだけかもしれないけど、本気で攻撃されていたら瞬殺だったよ・・・舐めていました。拳骨もいつの間にか受けていたしね。

色々勉強になった。戦闘が長くなればなるほど、動きも見えてきていたのはなんだろう？私もまだまだ強くなる事が出来るって事よね。

中将、ボガードはガガル大佐に案内され支部の中に消えて行った。部屋の案内と補給の事だ。

先ほどの戦闘で、ベルメールの刀が使い物にならないほどに、刃こぼれなどが見えた。

3人はこのまま街に繰り出し修理や買い出しに向かった。

刀や剣が置いてある店について三人は、ベルメールの刀を探し始めた。

一振りの刀に、魅入られるように引き寄せられるのがわかった。私の刀に似ているからだろうか？刀に詳しくないけど気になる刀。

店の規模にしては良業物と業物が置いてあるし、値段を見たら・・・高い!!手が出る価格じゃないわね・・・気になる刀の価格は・・・30万ベリー普通の刀よりは少し高いぐらいかな？

「ベルメールさん、この刀凄く気になるんですけど、これにしませんか?」

「そうね、刀の良し悪しは全然私もわからないのよね」

「おじさん、この刀はいい物なの?普通の物よりは高いけど?」

「それは指定業物に載ってないが、なんか普通じゃない気がしてよ、その値段なんだが、買ってくれるならもう少し安くしてやるぞ」

「ベルメールさんどうします?私はいいい刀だと思っただけ?」

「そうね、それにしようかな?…おやじいくらまけてくれるの?」

「そうだな、25万ベリが限界だな。この中のもう一本買ってくれるなら合計で30万ベリ!これでどうだ?」

「ベルメールさんノジコの方も買おうか?武器はあった方がいいでしょう?…ノジコどれか選んでよ」

「私ができるわけじゃないじゃない、くいなが選んでよ」

ノジコの分は、くいなが扱いやさそうな刀を選んで、2本買うことになった。

ただ持っているだけになるだろう。ノジコは刀を振った事も今は無いのだから。ノジコも訓練で使うようになるはず、今後に期待だろう。

「ねえノジコは少しでも刀を使えるようになりたい？」

「どうかな？くいなのようにはなれないと思うけれど、自分の身は守れるように……大事なものを守れるようにはなりたいわよ」

「へーノジコもそんなこと思っていたんだ！悪戯ばかりしていた悪ガキが、成長したもののね」

「ベルメールさん!!私はいつまでも子供じゃありませんから」

「はいはい」

支部宿舎に戻りながら、少し背伸びをした会話、3人は久しぶりな時間を感じていたようだ。

8話、確信犯

何事も起こる事無く出航。カームベルトを通るらしく、本部まではそんなに日数はかからない。

出航から4日目、ガープとはある場所フーシャ村にたち寄る。孫たちに会うとかで、同じぐらいの年齢のくいな達も会わせたいとか。

居酒屋マキノの店に立ち寄り、近況を聞くガープ。店の外で待っていたお付きの海軍やくいな達を見てびっくりしていたマキノ。

ここから森の中にある家までは歩きだ。ボガード達海兵はこのまま船に戻り待機だ。

ルフィ、エース、サボに会える!!何話せばいいんだろう?でも今の私よりも弱いんだよね。あれ?エース、サボ、ノジコが同じ12歳だったかな?私くいなが13歳、ルフィが9歳かな?

ノジコと初めて会った時に、私の方が2歳上だったと思ったんだけど?その後すぐに

ノジコの誕生日だった……ちょっと恥ずかしい思い出……
サボはすでにフーシャ村？ダダンの所にはいないんだった。

「ダダン!!おらんのか!!家ごと吹き飛ばさずぞ」

「……ガープさん!!いますよ！何そんな物騒なこと言つて」

「孫の様子を見に来たんじゃが、どこだ?」

「ルフィもエースも最近ここに戻つて来てないんで、森の中に作った家にもいるんだらうね?」

「そうか、くいな!ノジコ!二人を見つけてここに連れて来い。それと何か獲物も捕つてくるんじゃ」

「えくく!顔もわかんないんですけど?」

私はわかるけど……ノジコにはわかるわけもない……

「子供二人、森の中に居るのはあ奴らだけじゃし、ここから見える長い木に向かつていけ、そのあたりにいるはずじゃ。無理矢理にでも連れて来い」

「……………」

言われたまま、目印の木に向かいます。それと獲物だ。

女性二人に獲物を取ってこいと……これは普通じゃない。だがどんな獲物があるのかわからないが危険はないはずだ。

ルフイ達が勝てないような動物はここにはいない、まして今はくいなが居るのだ。その事をグループも知っていたのであろう。

もしかしたら、ノジコでも勝てるぐらいかもしれない。

歩く事数十分、人影が二つ、くいなが声をかけた。

「こんにちは」

「海軍!!お前ら誰だ?」

くいなとノジコは海軍支給の制服を着ていた。エースが気が付き、さほど驚きもせず答えて来た。

もうこの辺りでエースより強い人や、獣はいない。対応も子供の時と違い余裕がある。

大人に近づく頃まさに成長期、半年でも変わる。ルフイはもう少し先だろう。

大きくなっていて！もう子供じゃない感じだよ！ルフィはまだまだ子供だけど、エースは背も高くなっていて見違えている！サボが居なくなつて2年後だから大きくもなるか・・・

私と同じ年なんだからそれも当たり前かな、身長はここ最近急激に伸びているし、体も成長している。ノジコにも言える事だけどね。

「私達は、ルフィとエースを探しに来ました。あなた達がそうよね？」

「ああ、そうだ！俺がエースだ。何か用か？」

「私はノジコよ」

「俺、ルフィだ」

「くいなよ、よろしくね。見ての通り海軍よ、なぜここに来たか大体予想できるんじゃないかな？」

「じじいーか！」「じーちゃん!!」

エースとルフィ、ガープが来たとわかり、逃げる算段をしているようだ。だが目の前にいるのは年も変わらない女性二人。

二人は捕まるはずなんかないと思ったのだろう。ガーブが居ない以上どうにでもなる。

「正解。…ノジコ、多分逃げるからルフィを捕まえて！私はエースを。…何事も無くガーブ中將の所まで来てくれるといいんですけど？」

「エツ！私が?!出来るかわからないけどがんばるわね…」

「何言ってるんだ？お前達が俺たちをどうにかできるとでも思っているのか？ルフィー！海軍だろうとかまう事無いが、負けたりするなよ！」

「おおう!!俺は負けねえ!!エースこそ負けるなよ!!」

やっぱりこうなった…ケガさせないように手加減を…これが難しい。

ノジコはルフィ相手に未知数、両者とも怪我だけはしないほしい。

今の時点でエースはどれほど強くなっているんだろう？楽しみでもある。

エースは配管のパイプ？ルフィは何も武器は持っていない。対してくいな達は二人とも刀。

ノジコとルフィの小競りあい、戦闘経験の乏しいノジコにはきつい様で、防戦一方

になっていた。決定打は無いが段々と体にダメージを負って来ている。既に半泣き……

うゝん……やっぱりノジコではルフィの相手は務まらないみたい……私がすぐにも加勢しないと面倒な事になるね。

「エース、すぐに終わらせるよ……行くわよ！」

くいなは、素早くエースの目の前まで行き、持っていたパイプを切り捨てた。

移動したのが見えなかったエース……手に持っていたパイプが見事に半分上が無い事に驚く。首元に冷たいものが当たった。

負けを認めたかのように、武器を離れた。

「これでいいかしら？」

「……」

「おとなしくしてよ……ノジコに加勢に行くんだから」

「ルフィーー!!逃げろー！こいつには絶対に勝てねー!!」

ルフィに伝えると同時に、くいなを後ろから抑えた……だが……

「エ、エース君……伝える事はいいのよ……ルフィを助けようとする行動もいいの……でもなんで!!私を抑えようとしている手が!!私の胸の上にあるのかな!!」

「あ!!」

「あーじゃないわよ!!……『ボコツ!!』……10年早いよ!!いきなりはやめて!!」

振り向きざまに殴られ巨木に激突したエース……伸びているようだ。

これを見ていたルフィはくいなを襲うが、まだ平常心ではないくいな……手加減知らずでエースのとぼっちりを受けたルフィだった。

「くいなこれどうするのよ?」

「うーん。担いでいくしかないよね」

「……」

帰る途中で、もう一つ言われた事も運よく遂行できた。大きな猪も確保。ガープが待つダダンの家に着く頃には、日が暮れ始めるころだった。